

「もう一つの現実」
詩篇 2（新共同訳）

I 導入部

- みなさんおはようございます。最初にお祈りをさせていただきます。心合わせてください。
- 最初にみなさんに、一つ質問をしたいと思います。一つの質問をしたい。皆さんは、今、目の前に何が見えていますか。目の前に、何が見えているのでしょうか。
- 「いやいや、塚本先生が見えていますよ」と言われるかもしれません。あるいは、前の人の頭が見えているかもしれません。
- 少し言葉を変えましょう。あなたは、信仰の目で、何を見えていますか。このなかで、クリスチャンではないという方にとっては、何を言い出すのかと思われたかもしれませんが、クリスチャンには、クリスチャンではない方には見えない「現実」が見える。
- それは、もちろん、本当にこの肉眼で見えるということもあるかもしれませんが、基本的にはこの目では見えません。それは、聖書が約束する現実です。それは将来に実現する現実、いま、ここにある現実でもあります。
- 今日受け取りたいのはこのことです。現実、目の前に見えることと、信仰の目で見えることが違うのだ。「もう一つの現実」があるのだと言うことを、今日はご一緒に受け取り、私たちの主イエス・キリストをご一緒に礼拝していきたいと思います。

II 本論部

一. 主と主の民を攻撃する王たち

- 本日読まれた詩篇 2 篇は、作者の名前は書かれていませんが、使徒言行録の 4 章によると、ダビデが書いたとされています。
- さらに、この詩は「王の詩篇」と呼ばれ、他にも同じような詩篇がいくつかあるのですが、おそらく王様が「即位」する、王様になるときの礼拝で歌われたのではないかと、祈られたのではないかとされています。
- 2 節に、「主の油注がれた方」とあります。「油注がれた者」というのは、ヘブライ語ですと「メシア」、新約聖書のギリシア語ですとキリストゥス、日本語でキリストですが、この時代においては、イスラエルの王様を指す言葉です。
- 6 節に「聖なる山シオンで／わたしは自ら、王を即位させた。」。「シオン」というのはイスラエルの首都エルサレムです。私も行ったことがあります、山の上にある町なんですね。
- 7 節には、「お前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ。」とあります。これも、新しい王が即位するときのことを現していると言われます。
- 様々な小説や映画などでも、よくドラマが起こるのは、前の王様が死んで、新しい王様が王様になる、即位するときだと思えます。なぜなら、そういうときこそ、国が不安定になるからです。1-2 節にあるように、周囲の国々が騒ぎ立って、その国を攻めて、滅ぼそうとしてくることがある。
- 3 節には、「我らは、枷をはずし／縄を切って投げ捨てよう」とあります。これは、一見、何を言っているか分かりにくい箇所です。「
- 枷」というのは、足枷などと言われますが、牢屋の中で足につけられるアレです。
- 「縄」というのは、「綱」とも訳される言葉ですが、誰かのしもべ、奴隷であるということです。
- 実は、これらの言葉は、旧約聖書のなかでは、イスラエルの民が、神さましもべであることを表すために用いられています。イスラエルの民が、神さまのものである、神さまを愛し、愛される関係であるということ表しているのが、この「枷」や「縄」という言葉なのですが、その枷をはずし、縄を切って捨てるというのは、イスラエルの民々と神さまの関係を切ってしまうという意味なのです。
- なので、この詩篇 2:1-3 で描かれているのは、主と、主が油注がれ、主が立てた王を攻撃する国々です。
- 神さまと、神さまの民イスラエルの関係をぶち壊しにしようとする王たちがいる。
- そのような状況がある。そしてこれからもありうるのだということを、イスラエルは、この詩篇を通して、歌い続けたのです。

- 日本という国に生きる私たちにとって、この詩篇は、どこか遠い国の話ではありません。縁遠い、自分とは関係のない世界の話ではない。
- 私はこの教会に来る前に、アメリカの神学校・大学院で勉強していたのですが、一人の教授にあるときこのように言われました。
- 日本では、キリスト教がなかなか広がらない。1%をなかなか超えられない。そうなんですよねーと言っていると、「当たり前だ」と。なぜなら、日本という国は、全世界で最も長く、かつ徹底的に、主の民を攻撃し、迫害をした国だから。
- ローマ帝国の迫害は確かに厳しかった。でも、短期間だった。中国ヤソ連も、短いし、しかも一部の教会は残ることができた。日本は、200年以上、世界で最も長く、しかも一人のクリスチャンの存在も許さなかった。
- そのような国である以上、文化のなかに、キリスト教へのトラウマがあるのはある意味で当然である。そういう意味では、あなたの存在は奇跡だ。そして、日本の教会は本当によくやっている！そのように言ってきたんですね。
- ご存知のように、この国は、主の民であるキリシタンたちを、徹底的に迫害しました。江戸時代初めが最も激しかった。
- 明治時代にも、隠れキリシタンたちは徹底的に迫害された。嫌がらせをされ、拷問され、殺されていった。日本という国は、この国の王たちは暴力によって、彼らと神様の関係を壊そうとした。
- 私たちは先週、あの戦争が終わった8/15を迎えましたが、第2次世界大戦中にも、政府は、クリスチャンたちと神さまの関係を怖そうとした。その結果、多くのクリスチャンたちが、政府の圧力に負けて、神社を参拝し、天皇を崇拝した。再臨の信仰を強調したホーリネスの牧師たちは逮捕され、「天皇とキリストどっちが上か？」と聞かれ、拷問を受け、信仰を否定していった牧師たちもいたと言われています。
- パウロが、イエスさまを信じる前、クリスチャンを迫害し、いじめ、殺していた時代のパウロに、イエスさまはこう言われました。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」(使徒9:4)
- 別にパウロは、イエスさまを迫害していません。しかし、イエスさまは言うのです。主の民を迫害することは、イエスさまご自身を迫害することである。
- 歴史のなかで、この国は、主と、主の民を攻撃し続けてきました。そして、今、この瞬間にも、世界中の多くの国や地域で、クリスチャンたちは迫害されている。不利益を受けたり、教会堂が破壊されたり、あるいは命の危険にさらされている。
- 主と、主の民を攻撃する国々がある。主と、主の民の関係をぶち壊しにしようとする王たちがいる。そのような現実が、私たちの目の前にはあるわけです。

二. 神の目から見た現実

- しかし、最初に申し上げたように、私たちの目の前にあるのは、その現実だけではない。もう一つの現実がある。その現実が見えるでしょうか。
- 4節からをごらんください。「天を王座とする方は笑い／主は彼らを嘲り、憤って、恐怖に落とし／怒って、彼らに宣言される。」主はそのような国々の姿を、そのような王たちの姿を見て、笑う、あざ笑う。こんな感じじゃないかと想像します。「おまえら何やってんねん。なんでそんな意味ないことやってんねん。」
- あるいは、主は怒(いか)られる。ご自身の民が、攻撃されるとき、激しい怒りをもって語られる。
- 6節、「聖なる山シオン(これはイスラエルの首都エルサレムですね)で／わたしは自ら、王を即位させた。」、7節に「お前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ。」とありますが、もともとのヘブライ語では、「わたしは」という言葉が強く強調されています。わたしが、その国を、その王を立てた。わたしがやったんだ。おまえたちに妨げられるわけがないだろうが!と言う感じです。
- 確かに、迫害で宣教は止まらなかった。日本でも、どんな迫害のなかでも教会は残りました。かつて大きな迫害があり、そして今でも減ったとはいえ迫害がある中国やロシアでは、今では爆発的にクリスチャンが増えている。
- しかし、実は、この詩篇がまず歌われた舞台である、イスラエルの国は滅びるのです。いやいや、それは約束が違うじゃないと思われるかもしれませんが、それは、イスラエルが、自ら、主との関係を捨てたからなんです。
- ここで、8節をご覧ください。「求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし／地の果てまで、お前の領土とする。」

- これは教会もそうですが、本来、イスラエルという国は、自分たちさえ良ければ良いという国ではなかったんですね。主がアブラハムに約束されたように、イスラエルは、全世界を祝福するために、選ばれた。
- ここで言うともろもろの国を、地の果てまでも、支配する、それはもちろん普通の支配ではなく、むしろ仕え、祝福するために、選ばれた。それが彼らの使命でした。
- しかし、彼らはここで「求めよ」と言われる主の声を無視し、やがて、退けられていくのです。

三. イエスがもたらした現実

- 最初に申し上げたように、おそらくこの詩は王の即位のときの礼拝で祈られ、歌われたものです。しかし、王がいなくなってからも、イスラエルの民はこの詩を歌い続け、それゆえに詩篇として残っていきましました。
- イスラエルは、王がないのに、この詩を、その礼拝のなかで、歌い、祈り続けた。なぜでしょうか。
- それは、彼らが、やがて、このような王を、主を立ててくださると信じたからです。
- どれだけ迫害を受けようとも、その苦しみのただなかで、「希望」を抱き続けた。油注がれた者、メシア、さきほど何度も賛美しました。まことの王であるキリストを主が送ってくださると信じ、この詩を歌い続けたのです。
- イエスさまが洗礼を受けられたとき、父なる神さまはこのように宣言されました。
- 開かなくて結構ですが、マルコによる福音書 1:10-11。「水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。」
- これは、この詩篇を意識して、語られたと思われます。
- ヘブル人への手紙 1:5 でも、このように語られています。「いったい神は、かつて天使のだれに、／「あなたはわたしの子、／わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた、／「わたしは彼の父となり、／彼はわたしの子となる」と言われたでしょうか」。
- これは、イエスさまが天使よりも偉大であるということ語っているなかですが、この詩篇 2 篇が、イエスさまのこととして引用されています。
- さらに、使徒言行録 4:24-28 ではこのように語られています。これは、迫害にあった弟子たちが釈放された後に語った言葉なのですが、もし開ける方は開いてみてください。もちろん、聞いていただく

4:24 これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声をあげて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です。

4:25 あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、／諸国の民はむなしいことを企てるのか。

4:26 地上の王たちはこぞって立ち上がり、／指導者たちは団結して、／主とそのメシアに逆らう。』

4:27 事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。

4:28 そして、実現するようにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行ったのです。

- イエスさまは、苦しみを受けられました。十字架の上で、血を流し、苦しみを受けました。イスラエルと同じように、教会と同じように、キリシタンたちと同じように、北朝鮮のクリスチャンたちと同じように、苦しみを受けられました。
- イスラエルと教会は、自らの罪ゆえに苦しんだこともありました。いや、そちらの方が多かった。でも、イエスさまは、なんの罪もなかったのに、イスラエル・教会以上に苦まれたのです。国々から、人々から攻撃され、苦しまれた。なぜでしょうか。あなたを、それほどまでに愛されたからです。それほどまでの価値が、あなたにあるからです。
- その苦しみと、勝利の復活によって、この詩篇で歌われていることが実現したのです。もう一度 2:8 をお読みします。「求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし／地の果てまで、お前の領土とする。」
- イスラエルが果たせなかった、全世界の祝福を、イエスさまは、なしてくださった。地の果てまでに救いをもたらしてくださったのです。この日本まで、福音を拒否し続けるこの国まで届いたのです。

四. やがてイエスがもたらす現実

- 9 節、「お前は鉄の杖で彼らを打ち／陶工が器を砕くように砕く。」

- 主は、主と主の民を攻撃する者たちを、鉄のつえ、これは王様が持っている笏を指していると思われませんが、それを使って、陶工、器を作る人ですね、彼らが器を簡単に壊すように、敵を打ち砕く。
- これは、黙示録 2:27 で、イエスがそれを持つ者として紹介されています。この世界が終わるとき、新しいエルサレムで、シオンの山で、まことの王であるイエスさまが完全に勝利されます。悪は、やがて完全に滅びる。正義が実現する。全ての苦しみは終わる、涙は拭われるのです。
- しかし、興味深いのは、次の箇所です。「すべての王よ、今や目覚めよ。地を治める者よ、諭しを受けよ。恐れ敬って、主に仕え／おののきつつ、喜び躍れ。子に口づけせよ／主の憤りを招き、道を失うことのないように。主の怒りはまたたくまに燃え上がる。」
- 「彼らは悪だから、ただ滅んだら良いのだ」とは言われぬ。彼らも、滅んで欲しくない。主は、今も、国々を、人々を招いている。
- 今や目覚めよ。冷静に考えてみなさい。このまま好き勝手にして良いと思っているのか？現実だけを見てはならない。もう一つの現実を、きちんと見なさい。
- 主を恐れなさい。足に口づけをすることは、しもべとなるということです。本当の王であるイエス・キリストに従いなさい。主の足元に、十字架のもとに来なさい。そこに本当の赦しが、自由があるから。さもないと、危険なのだ警告するのです。
- 8月が来ると、いつも思われます。いろんなテレビ番組があるからだと思いますが、政治家たちのために、リーダーたちのために祈らなければならない。祈っていなかったことを、8月になると悔い改めさせられるんですね。
- 私たちはすぐあきらめます。祈らなくなります。しかし、主は今も、あきらめておられない。主は今も招いている。情熱をもって招いている。天皇を、安倍首相を、国会議員たちを、招いている。トランプ大統領を招いている。金正恩を、招いている。私たちも、教会も、この詩篇を歌うことで、彼らを招いている。
- もちろん、王たちや、国家のリーダーたちだけではありません。いまだイエスさまに敵対する私たちの友人たちを、家族を、この地域の人々を招いている。私たちもこれから、祈りなかで、彼らを招くのです。なぜなら、この方にこそ、本当の安心があるからです。最後にイスラエルは歌います。「いかに幸いなことか／主を避けどころとする人はすべて。」さいわいなるかな。主に頼る者は、どんな迫害があっても、どんな苦難があっても、さいわいである。この方にこそ、本当の安全がある。
- 改めて考えていただきたい。あなたの目の前には、何が見えていますか。もう一つの現実が、見えていますでしょうか。お祈りしましょう。